



土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

No.12 1999.8.

目次

土木史ニュース	日本橋架橋88周年-国指定重要文化財に	鈴木 伸治	1
フォーラム	エンジニアのアート展	岡部 憲明	2
地域のニュース	愛媛県美名瀬橋のリニューアル	岡崎 直司	3
	豊川市上の菫遺跡で発掘された律令期の幹線道路遺構	山根 巖	3
	オランダ紀行	榛澤 芳雄	4
海外土木史	登録文化財となった土木構造物一覧		5
登録文化財ニュース	電気学会における技術史関係の活動	高橋 雄造	5
関連学会ニュース	第19回土木史研究発表会の報告		6
学会の動き	第20回土木史研究発表会論文募集要項		6
	土木史研究委員会平成11年度名簿		7
	土木史フォーラム小委員会平成11年度名簿		7
行事案内	第2回オーストラレイシアン エンジニアリング ヘリテッジ コンファレンス		7
	歴史的橋梁に関するコンファレンス (Wheeling吊橋建設150周年記念)		7
土木史関係図書	Series of Studies in the Histry of Civil Engineering 他		8

土木史ニュース

日本橋架橋88周年-国指定重要文化財に

日本道路元標の所在地として、また日本を代表する橋梁の一つとして知られる日本橋が4月3日に架橋88周年を迎え、名橋「日本橋」保存会主催のもと、日本橋架橋88周年記念行事が開催された。

名橋「日本橋」保存会は昭和43年に設立され、年に一度行われる「橋洗い」といった清掃、環境整備、イベントの開催を行ってきた。今回のイベントは77周年、80周年に次ぐもので名橋の米寿を祝うイベントとして盛大に行われ、パレードには地元の神輿や稚児行列など1,300人が参加し沿道には35,000人が詰めかけ大変なにぎわいとなった。

また、88周年を機に日本橋は重要文化財としての指定(5月13日付け官報公示)を受けた。指定にかかる主たる理由としては明治期の道路用橋梁の技術的達成度を示す貴重な道路橋であるという土木技術史的な重要性、また土木技師、建築家、彫刻家が協同した装飾橋梁の代表作であり、ルネサンス式による橋梁本体と和漢洋折衷の装飾との調和、その意匠的完成度の高

さなどが挙げられている。建設省所管の物件としては初めての指定となる。また重要文化財指定に先立ち、関東大震災、第二次世界大戦などの災害により損傷の激しかった装飾柱を中心に創建当初の状態への復元修復が行われた。

日本橋の創架は慶長8年(1603年)とされ、慶長9年には日本橋に全国里程の原点を置き各街道に日本橋からの距離を示した一里塚を築くことが定められている。以後火災による焼失などによりたびたび架け替えられたが、元和元年(1615年)の再架時の記録によれば敷板の長さが三十七間四尺五寸(約68m)と現在を上回る規模であったという。現在の日本橋は明治44年(1911年)4月3日に架設されたもので、長さ49m幅27mのルネサンス式石造アーチ橋となっている。土木技術者米元普一的设计に妻木頼黄が意匠設計を行い、装飾部は東京美術学校が制作した。設計者妻木は装飾と橋体の調和、帝都橋梁の重鎮としての美観と威厳を如何に実現するかという点に腐心したという。

(東京大学 鈴木 伸治)



戦前の日本橋



架橋88周年記念行事

フォーラム

エンジニアのアート展



岡部 憲明

(建築家、エンジニアのアート展サイエンス・コミティ・メンバー)

1997年6月24日から9月29日まで、パリのボンピドゥー・センターで「エンジニアのアート」展が開かれた。18世紀末から今日に至るまで200年間にわたり人間の環境を構築してきたエンジニアたちに焦点を置いて検証してみようとするユニークな企画で、センターの1階と中2階、地下の一部を使って延4,000平方メートルに、200年間の技術者たちの生み出した建築や橋梁などの構築物が模型、図面、映像によって展示された。

会場は鉄、コンクリート、大空間構造、今日の探求の、四つのセクションに分かれていて、鉄という素材に注目した第一会場では、クリスタル・パレス(水晶宮)、パディントン駅、フォース橋、ブルックリンブリッジ、ゴールデンゲイト橋、パリ万博機械館、ガラビの鉄道橋、エッフェル塔、シュコフによるモスクワのラジオ塔など、19世紀から今世紀初めの巨大な鉄の構築物が、貴重な図面やエンジニアたちのノート、それにいくつかのディテール部材、大きな壁を使ったスライドなどで展示された。

第二セクションは鉄筋コンクリートの建造物の歴史的展示で、鉄筋コンクリートの発見から展示されたが、圧巻なのはプレストレス・コンクリートの発明家ウジェーヌ・フレシネ設計のオルリー空港の巨大な格納庫の建設記録映画だろう。今日の建設現場と比べても見劣りしない大規模な移動足場による建設の様子が生々と映し出されていた。シェル構造の大家フェリックス・キャンデラのいくつかの模型は、幾何学的な美しさと施工法の工夫をよく伝えてくれた。ピエール・ルイジ・ネルビイによる大空間のコンクリート構造、リカルド・モランディやロベール・マイヤールの橋の模型が一同に会している光景に、構築の輝かしい歴史に取り囲まれた感動があった。

第三のセクションは大空間の軽量構造。バックミンスター・フラーのドームは、アメリカにあった実物が分解され、搬入されて、ボンピドゥー・センター1階で組み立てられた。自然の形態を深く追求し、テント構造、テンション構造に新たな世界を拓いたフライ・オットーのザイルネットの屋根の模型が、このセクション

の会場全体を覆っている。坪井喜勝(構造)丹下健三(建築)による代々木の国立屋外競技場や、川口衛(構造)村田豊(建築)による空気膜構造の傑作、大阪万博富士パヴィリオン(編注1)や蘭博パヴィリオン(編注2)など、日本における大空間構造の挑戦的試みもこのセクションに展示されている。地階の第四セクションでは、現代の様々な建築土木技術の方向が見られた。様々な素材の追求、現代の施工法、超々高層ビルの計画など、未来に向けた可能性の追求が展示され、日本のプロジェクトでは播磨(構造)による長野オリンピック・スピードスケートリンク、関西国際空港旅客ターミナルビルなどがこのセクションに展示された。単に技術を展示するのではなく、技術によって創り出された環境の質と、技術の発明の創意の双方が、選択の基準になっている。

終了直前に行われたセミナーに招かれて参加したが、3ヶ月の開催で閉じてしまうことが残念だという声があちこちで聞かれた。500ページにわたるカタログ(注)が記録として出版され、21世紀に向けた一つの遺産となっている。

(注)「L'Art de L'ingenieur」ボンピドゥー・センター編
Le Moniteur刊

(編注1)'70日本万国博覧会富士グループパヴィリオン
(大阪府)

(編注2)第12回蘭世界会議展示場



「エンジニアのアート」展、会場風景
模型はフォース橋

地域のニュース

愛媛県美名瀬橋のリニューアル

愛媛県に保内町という面白い町があります。丁度、九州に向けて細長く佐田岬半島が伸びていて、その根っこにある人口一万二千人程の町です。全国的には無名ですが、なかなかどうして近代化遺産の宝庫と言える町で、明治22年、四国初の電燈なども灯っています。

この町に、昭和8年に完成した美名瀬橋というのがあり、生活橋として親しまれています。施工は地元安藤組。架橋当時は、近くの紡績工場へ通う女工さんたちで大層にぎわったこの地域一番の橋でした。又、当初、欄干部分が鉄柵でしたが、戦時中に供出となり、今のアーチデザインに補修されたようです。

平成9年、老朽化による架け替え工事に際し、リニューアル工事が施され、翌10年3月に完成したのが現況の写真です。この工事に当たっては、保内まちなみ倶楽部や保内大学など、地元のみちづくりグループに対し、行政から打診があり、その提言書に基づいて工事が進められました。又、それに先立ち、平成9年1月8日には、「何故今、橋なのか」のテーマで、保内大

学の時局講座会が開催され、日本大学理工学部教授伊東孝氏より貴重な助言や提言を頂きました。そうしたバックアップもあり、60有余年の歴史を刻んだ美名瀬橋は、周囲の景観保全に寄与しつつ残されることになりました。

(ウオッチング工房八見舎 岡崎 直司)



宮内川に架かる美名瀬橋
後方は旧東洋紡績川之石工場レンガ倉庫

豊川市上の蔵遺跡で発掘された律令期の幹線道路遺構

愛知県豊川市教育委員会では、豊川西部地区画整理事業に伴う「上の蔵遺跡」の発掘調査を行い、3月7日見学会を開催して、これが奈良時代の律令期の幹線道路の一部の遺構であることを発表した。

現場は豊川市八幡町にあり、律令期の三河国府政庁があった比高5m程度の白鳥台地と、三河国分寺があった同3m程度の八幡台地間の約800mの間に挟まれた低地に当たる部分である。

道路遺構の規模は、道路幅が約19mと非常に大きく、道路敷幅は約22m、盛土高さは約1.5mであり、今回の調査で低地の内延長約109mの直線の道路状遺構が確認されている(写真参照)。

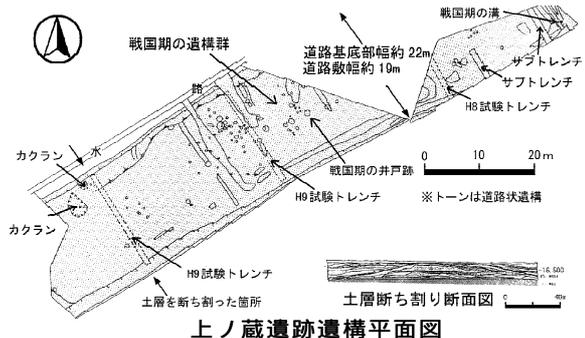
遺跡からは戦国期の遺構群の下から、律令期の須恵器が出土しており、当時の三河国府と国分寺及び国分尼寺を結んでいた幹線道路と見ら

れる。道路の構造は、何層にも土を積み重ねて搗き固める「版築工法」で造られており、表面は小石交じりの土を搗き固めて仕上げられている。側溝については確認されていない(図参照)。

律令期の幅広い直線道路遺構と比較すると、資料がやや古いが古代交通研究会会長の木下良氏(元國學院大學教授)の纏めた資料によれば、大和や摂津の大道の幅18~23mに近い大きさであり、山陽道(大路)東山道や東海道(中路)の幅5~13mよりも大きい。その理由として一説によれば、両台地の狭窄部にあり、上流部に降った雨をこの構造物で一時的に堰き止めて洪水を防いでいた、治水施設の役目も持っていた可能性も考えられている。この幹線道路遺跡は当時の東海道の一部と推定されるが、特別に大きい道路幅の理由については、今後の研究が期待されている。(大日本コンサルタント(株) 山根 巖)



道路遺構
(国府政庁跡側より国分寺跡側を望む)



オランダ紀行

今回海外研修の機会を日本大学よりいただき、オランダ、イギリスの地を訪問した。特にロッテルダム（Rotterdam）について書くことにする。

ロッテルダムはオランダ南西部で、ライン（Rijn）とマース（Maas）川の河口に位置する大港湾都市である。まずこのロッテルダム港の北岸に高さ185mのユーロマスト（Euromast）タワーが目に入る。これは1960年、町の600年誕生で建てられたもので、10年後はその上に宇宙タワーが建てられた。ここに昇ると最長可視距離30kmのパノラマが広がり、ロッテルダム市が一望できる。このタワーはヘッド・パーク（Het park）に建っており、ここにボーイマンス・ファン・ボウニンゲン美術館（Boymans-Van Beuningen Museum）とディクジエト大学病院（Dijkzigt Hospital）そしてエラスマス大学（Erasmus University）がある。この公園は森と湖がコントラストに広がり、日曜日には、庭園のあちらこちらにピアノが置かれ、ミニコンサートが開かれる。勿論野外専門のコンサート場もあり、そこは入場料が必要である。この公園にあるボーイマンス美術館は1955年に建設されたものである。この名称はF.J.O. ボーイマンス（Prof. F.J.O.Boymans）氏が市へ寄付した美術収集品によるもので、14世紀から現在迄の美術品である。レンブラント、セザンヌ、ピカソ、ゴッホ等の作品である。

公園の周辺を見渡すと住宅や商店街があり、タックス博物館（Belasting Museumの中にある）もある。ここは税の発祥についての話が歴史的な系譜で残されている。現在、オランダの物品税は17%であり、それまでの道のりが記載してあった。入場は無料であるが、訪問者名簿があり、そこに記載する必要がある。勿論、庶民生活の写真も同時に展示している。

ユーロマスト・タワーから望むと赤い鉄橋（Willemsbrug）と新しいスチール（Erasmusbrug）の橋が見える。赤い鉄橋は1980年に新ウィレムス橋として建設されたものである。この橋の名は1874年ウィリアム 世がロッテルダムを訪問した時に記念として命名されたものである。この近く、ボームピヤス（Boompjes）の岸壁に白い3棟の高層アパートが建っている。これは建築家ウイム・クイスト（Wim Quist）氏の意図によるもので、北島（Noordereiland）から見ると三つの帆の船のように見え、この建物のカラーのライトアップとウィレムス橋のライトアップととても美しい夜景をかなでる。二重に見える橋は昔の鉄道橋（DE HEF）で現在はその下に鉄道トンネル（Sportunnel）が走っている。これは1987年に建設が始まり1993年にできたものである。この地域はセント・ラウレンス教会以外は第2次大戦時に壊滅したが、勿論その当時の面影が残っている。

旧港のところにあるMariniers Museumは戦時中の海運の痕跡が記録してある。またそこには近代的建築も目に入る。例えばキューブハウス（kijk-kubus）の建物が印象的である。そこから100m離れたVerre Landenの所にMuseum Schepenがある。これは水上に建物があり、東洋、南アフリカ、ミシシッピー、アマゾンの世界の筏が展示してある。

この近くのレーベ港（Leuvehaven）にオランダ海事博物館（Prins Hendrik Maritiem Museum）がある。その館外にAwoking Museumがあり、船のエンジン・タービンの歴史や船の荷役のクレーン等が展示してある。ここでは退役した人たちがボランティアで修復・維持管理を行っていた。勿論エンジンも稼働できるように毎日手入れをしている。丁度海事博物館では、長崎絵展が行われていた。1598年6月27日ロッテルダム港から商船隊が数隻日本に向けて出港した。そのうちの1隻デ・リーフデ号（De Liefde）だけが、2年後ようやく日本に辿り着く。それが400年に渡る日蘭交流の始まりである。この長崎絵展は、デ・リーフデ号の来港以来、長崎を本拠として貿易に携わっていたオランダ人の姿が、当時の日本人の目にどう映っていたかということ垣間見ることができる貴重な資料である。

オランダは英国が七つの海を制覇する以前は海国であり、それゆえ船舶を大切にするように思われた。終わりに旅行中色々とお世話をいただいたエジンバラのパクストン先生、NKKの五十畑氏、家村氏に深く感謝いたし、結びとする。
（日本大学 榛澤 芳雄）



DE HEF



ユーロマスト・タワーからの眺望

登録文化財ニュース

登録文化財となった土木構造物一覧

平成10年11月から平成11年6月までに文化財登録された土木構造物は以下の通りである。

名称	所在地	建設年代	名称	所在地	建設年代
名古屋港跳上橋(旧1・2号地間運河可動橋)	愛知県名古屋市	昭和2年	鹿背隧道	山口県萩市	明治19年
水間鉄道水間駅舎	大阪府貝塚市	大正15年	旧国鉄土幌線勇川橋梁	北海道河東郡	昭和11年
青下第一ダム	宮城県仙台市	昭和8年	旧国鉄土幌線第三音更川橋梁	北海道河東郡	昭和11年
青下第一ダム配水塔	宮城県仙台市	昭和8年	旧国鉄土幌線第五音更川橋梁	北海道河東郡	昭和13年
青下隧道入口	宮城県仙台市	昭和8年	旧国鉄土幌線十三の沢橋梁	北海道河東郡	昭和13年
青下第一ダム配水塔	宮城県仙台市	昭和8年	米内浄水場緩速系着水井	岩手県盛岡市	昭和9年
青下第二ダム	宮城県仙台市	昭和9年	米内浄水場緩速沈澱池	岩手県盛岡市	昭和9年
青下第三ダム	宮城県仙台市	昭和9年	米内浄水場緩速濾過池	岩手県盛岡市	昭和9年
青下量水堰	宮城県仙台市	昭和8年	米内浄水場1号濾過池調整室	岩手県盛岡市	昭和9年
青下ダム旧管理事務所	宮城県仙台市	昭和8年	米内浄水場2号濾過池調整室	岩手県盛岡市	昭和9年
青下ダム記念碑	宮城県仙台市	昭和9年	米内浄水場3号濾過池調整室	岩手県盛岡市	昭和9年
中原系苦地取水口	宮城県仙台市	大正9年	米内浄水場出水井	岩手県盛岡市	昭和9年
中原浄水場旧管理事務所	宮城県仙台市	昭和8年	米内浄水場水道記念館	岩手県盛岡市	昭和9年
荒巻配水所旧管理事務所	宮城県仙台市	昭和8年	三居沢発電所	宮城県仙台市	明治42年
荒巻配水地入口	宮城県仙台市	大正9年	旧町屋変電所	茨城県常陸太田市	明治42年頃
白岩砂防ダム	富山県上新川郡・中新川郡	昭和14年	本宮砂防ダム	富山県上新川郡・中新川郡	昭和12年
室蘭市旧室蘭駅舎	北海道室蘭市	明治45年	水道記念館(旧柴島浄水場送水ポンプ場)	大阪府大阪市	大正3年
呉市水道局三永水源地堰堤	広島県広島市	昭和18年	出典：月刊文化財		

関連学会ニュース

電気学会における技術史関係の活動

電気学会でも、技術史(電気技術史)の研究調査に関する活動を、1990年以来定常的に行っています。この活動は、土木学会をはじめ技術系諸学会の技術史関係活動に学んでスタートいたしました。1994年には、電気学会全国大会の際に、土木学会、日本機械学会、精密工学会、化学史学会の参加を得て、シンポジウム(技術の歴史に学ぶ - 諸学会の活動展開と相互交流)を開催いたしました。また、今回は『土木史フォーラム』で紹介するお許しをいただきました。土木学会をはじめとする皆様の御協力に対し、心からお礼申し上げます。

電気学会は、電気技術史技術委員会を1990年に設置しました。電気学会は1998年に100周年を迎え、このときに、一過性の記念イベントだけではなくて持続する歴史研究活動を実施するために、電気技術史研究の組織化を図ったわけです。

この電気技術史技術委員会では、3つの主要な活動を定常的におこなっています。第1に、ニューズレター『電気技術史』を刊行し、これは現在17号まで発行されています。第2に、調査専門委員会(任期は3年間)をもうけて研究調査をしており、その結果は電気学会技術報告として電気学会から発行頒布されています。現在は、史料等の保存・展示ガイド調査専門委員会、電気技術に果たした国立研究所の役割調査専門委員会、日本における珪素鋼板技術史調査専門委員会の3つが活動しています。第3に、年に数回、電気技術史研究会を開催しています。これは、電気学会内外の希望者が研究発表をおこなうもので、予稿(1件6-10ページ)は、電気学会が印刷して研究会当日頒布しています。現在まで20回の電気技術史研究会で開催され、

175件の発表がありました。この研究会では、個々の技術自体の発達史を調べるだけでなく、電気技術が社会で果たしてきた役割について、また、電気技術が歴史上でどんな文化的意味を持っていたかなどについて考える場となるように努めています。そのために、電気系以外の諸技術系・理学系、さらに文科系の方々の発表と来聴を希望しています。

技術者だけで歴史を調べて書いた場合、技術者にしか通用しないものになってしまいます。業界の言葉で語ったり書いたりしても、素人には理解されにくいでしょう。文系の人にも、女性にも、政治家やジャーナリスト等あらゆる人に理解してもらおうと思えば、歴史家の協力を仰ぐ必要があります。歴史家が電気史をとりあげて書くようになって、歴史上で電気技術が果たして役割を技術系以外の人々にもわかってもらえるようになれば、職業としての電気技術者の利益につながります。物件史料・文書史料を保存・整備して、利用しやすいかたちにすれば、歴史家が研究対象として電気技術史のテーマをえらんでくれるでしょう。こういうねらいから、電気学会では、技術史関係博物館・アーカイブ・記念物の調査に力を入れ、歴史家はじめ文系の人々の参加を強くもめています。

今後いっそうの御指導を賜りますよう、皆様をお願い申し上げます。

(東京農工大学 高橋 雄造)

電気学会:

〒102-0076 東京都千代田区五番町6-2

HOMATHORIZONビル8F

TEL:03-3221-7201 FAX:03-3221-3704

URL:http://www.iee.or.jp/

第19回土木史研究発表会の報告

第19回土木史研究発表会は、6月10～11日の2日間、関西大学100周年記念会館で行われ、約130名の参加がありました。

今回は、審査付論文17編、自由投稿論文35編、合計52編とやや少ない発表件数でしたが、論文集の事前配布や審査付論文のコメンテーターの廃止など、議論を活発化するための工夫もあって、活発な討論が行われました。

来年（2000年）の研究発表会は第20回目。土木史研究にとって記念すべきものとなりますが、東京で開催を予定しています。

大勢の方が論文を投稿され、より中身の濃い研究発表会となるよう、期待したいと思います。（吉村伸一流域計画室 吉村 伸一）

第20回土木史研究発表会論文募集要項

土木史研究委員会（委員長：大熊 孝・新潟大学教授）では、来年度の第20回土木史研究発表会（2000年6月中旬の土日予定、東京大学）を対象とした審査用論文を下記要領にて募集いたしますので、奮ってご投稿下さい。

1. 募集内容：

(1) 論文テーマ：自由（時代、対象、範囲等、すべて自由）。

(2) 投稿資格等：

第1執筆者は、土木学会会員に限る。

論文の応募者は、2編以上の審査用論文及び講演用論文（後日募集）の第1執筆者になることができない。すなわち、当該年度の第1執筆者としての発表は1編となる。

過去の研究発表会の講演用論文（自由投稿論文）を次年度以降において、審査用論文へ投稿することは可能であるが、全く同一の講演用論文をそのまま投稿することは認めない。

他の論文集等にすでに掲載された、あるいは投稿中の論文は原則として受け付けない。

第1執筆者は、研究発表会にて発表し、討議を行うこととする。

(3) 論文頁数：

12頁以内とする（1頁2,550字、9ポイント・25字×51行×2段組）。

(4) 使用言語：

日本語もしくは英語。

2. 応募方法：

(1) 投稿申込方法：

A4判用紙に「土木史研究、No.20 審査用論文応募」と明記し、

題目（副題も可）

発表者名・連名者名・所属

会員番号

連絡先・電話番号

和文要旨（200字程度）

過去の発表経緯

キーワード（適宜）

を記述して、FAXまたは郵送にて申込み下さい。投稿申込受付後、執筆要項等を送ります。

(2) 投稿申込締切期日：

1999年9月30日（木）必着

(3) 論文原稿の締切等：

(a) 論文原稿締切期日：

1999年11月4日（木）必着

(b) 査読料：

10,000円。論文提出時にお支払い下さい。

(c) 論文の採否：

土木史研究編集小委員会（委員長：藤田龍之・日本大学教授）が査読員の判定結果に基づいて決定し、12月下旬に通知します。

(d) 本原稿の作成：

修正が付加された論文（条件付採用）は、修正意見に対応した論文原稿を2000年2月15日までに提出して下さい。なお、採用された論文は、参考意見を勘案のうえ2000年3月31日までに完成原稿を提出して下さい。

(5) 論文掲載料：

採用確定後に下記の掲載料を請求します。

6頁まで：21,000円

8頁まで：28,000円

10頁まで：35,000円

12頁まで：48,000円

3. 送付先および問合せ先：

土木学会土木史研究編集小委員会

（担当職員：丸畑明子）

〒160-0004 東京都新宿区四谷一丁目無番地

Tel.03-3355-3559 / FAX.03-5379-0125

E-Mail : maruhata@civil.or.jp

注) 講演用論文(自由投稿論文)の募集要項は、土木学会誌12月号及び土木史フォーラムNo.13(1999年12月1日発行予定)に掲載します。

学会の動き

土木史研究委員会平成11年度名簿

委員長	大熊 孝	新潟大学	幹事	秋山 哲男	東京都立大学
副委員長	藤田 龍之	日本大学		石川 大輔	日本河川開発調査会
	渡辺 貴介	東京工業大学		伊東 孝祐	(財)国土開発技術研究センター
委員兼幹事長	馬場 俊介	岡山大学		岩淵 守義	運輸省港湾技術研究所
委員	青木 栄一	駿河台大学		貴堂 巖	佐藤鉄工(株)
	* 青山 吉隆	京都大学		* 後藤 光亀	東北大学
	* 石田 正治	中部産業遺産研究会		* 小林 一郎	熊本大学
	* 河村 忠男	中央復建コンサルツ(株)		佐々木 葉	日本福祉大学
	* 菅 建彦	(財)東日本鉄道文化財団		鈴木 圭	鹿島建設(株)
	* 北浦 勝	金沢大学		* 武田 義見	東京エンジニアリング(株)
	* 佐藤 馨一	北海道大学		高安 礼士	千葉県立現代産業科学館
	* 篠原 修	東京大学		為国 孝敬	足利工業大学
	高橋 和雄	長崎大学		堀 勇良	文化庁文化財保護部
	西 淳二	名古屋大学		安田 佳哉	建設省土木研究所
	藤森 照信	東京大学		吉田 充	日本大学
顧問	五十嵐 日出夫	北海学園大学		吉村 伸一	(有)吉村伸一流域計画室
	榎澤 芳雄	日本大学			注)*印は、新任

土木史フォーラム小委員会平成11年度名簿

小委員長	* 窪田 陽一	埼玉大学	地域委員	安達 實	真柄建設(株)
幹事長	藤井 三樹夫	(株)水環境研究所		* 市川 紀一	(株)クローバーテクノ
常任委員	* 石川 大輔	日本河川開発調査会		井上 肇	ジャス・コンサルタンツ(株)
	伊東 孝祐	(財)国土開発技術研究センター		清水 浩志郎	秋田大学
	小野田 滋	(財)鉄道総合技術研究所		進藤 義郎	北海道開発コンサルタント(株)
	久保田 稔男	国立科学博物館		* 田中 尚人	京都大学
	* 鈴木 圭	鹿島建設(株)		* 樋口 輝久	岡山大学
	鈴木 伸治	東京大学		松山 正将	東北工業大学
	* 高安 礼士	千葉県立現代産業科学館		宮本 裕	岩手大学
	長野 正孝	武蔵工業大学		盛岡 通	大阪大学
	* 堀 勇良	文化庁			
	* 吉村 伸一	(有)吉村伸一流域計画室			
事務局	深堀 清隆	埼玉大学			注)*印は、新任

行事案内

第2回オーストラレイシアン エンジニアリング ヘリテッジ コンファレンス
(The second Australasian Conference on Engineering Heritage)

オーストラリア エンジニアリング ヘリテッジ コンファレンスは、通常2年毎にオーストラリアで開催されているが、6~8年に1度の間隔でニュージーランドで開催される。

この会議はその第2回目である。

1. 主催：オーストラリア工学会(IE Aust)
ニュージーランド技術士会(IPENZ)の共催
2. 日時：2000年2月14~16日
3. 場所：ニュージーランド、オークランド
4. 対象：官、民の専門家、市民団体など広範な

対象者による建築、土木建造物の保存、再生、計画など

5. 問合わせ：

Barry Williams, Continuing Education,
The University of Auckland
Private Bag 92019, Auckland, New Zealand
Ph: 64-9-373-7599 ext: 8903
Fax: 64-9-373-7419
Email: b.williams@auckland.ac.nz
URL: http://www.cce.auckland.ac.nz/engher

歴史的橋梁に関するコンファレンス (Wheeling 吊橋建設150周年記念)

この会議は歴史的橋梁に関するコンファレンスとしては6回目にあたるもので、今回は1849年完成の当時世界最長の吊橋であったWheeling 吊橋を記念して開催するものである。

1. 主催：
Institute for the History of Technology and Industrial Archeology
2. 日時：1999年10月21~23日
3. 場所：アメリカ、ウェストバージニア州、

Wheeling

4. プログラム：歴史的橋梁、吊橋の保存再生に関わる研究発表

5. 問合わせ：

Institute for the History of Technology and Industrial Archeology
1535 Mileground, Morgantown, WV 26505, USA
Ph: 304-293-7169 Fax: 304-293-2449
Email: Lsypolt@wvu.edu

— 土木史関係図書 —

書名	著者・编者	出版元	価格
Series of Studies in the History of Civil Engineering	Joyce Brown, M.Chrimes, A.Skempton他	Ashgate Publishing Ltd., London	9冊、計£755 12冊刊行予定
日本機械学会創立100周年記念出版 機械工学100年のあゆみ	日本機械学会	日本機械学会	¥5,000
北九州市土木史	北九州市産業史・公害対策史・ 土木史編集委員会	北九州市（企画局企画政策室）	¥3,000
身近な土木の歴史 -文化の演出者たち-	為国孝敏	東洋書店	¥1,700
青函隧道	三田英彬	小学館	¥1,000
土木造形家(エンジニア・アーキテクト)百年の仕事 近代土木遺産をたずねて (注)	篠原修 文 三沢博昭 写真	新潮社	¥3,900
世界の橋物語	ガホル・スト・アト 著 成瀬輝男 監修・訳	山海堂	¥2,800
わが国における鉄道用煉瓦構造物の技術史的研究	小野田滋	研友社	¥6,000
日本煉瓦史の研究	水野信太郎	法政大学出版局	¥11,500
千葉県の産業・交通遺跡	千葉県教育委員会	千葉県教育委員会	¥800
常盤台住宅物語	板橋区教育委員会	板橋区教育委員会	¥500
河道計画の技術史	山本晃一	山海堂	¥7,600
ぐんまの土木遺産	(財)群馬県建設技術センター	(財)群馬県建設技術センター	¥5,000

注)「土木造形家百年の仕事」は残部僅少

土木史フォーラム購読会員には特別価格(3,120円+税)にて頒布

申込先: 社団法人日本工業協会事務局

TEL:03-3552-3201 FAX:03-3552-3206

編集後記：本号から土木史フォーラム編集小委員会のメンバーが大幅に入れ替わりました。前委員の皆様には長い間ご尽力頂き、どうも有り難うございました。これからも質の高い情報提供を心がけていく所存です。

なお土木史フォーラムでは、今後より多くの出版図書を紹介していきたいと思っております。特に地方出版図書については、土木史に関わる優れた内容を有するものが多いにもかかわらず、出版情報が少ない状態です。そこで、こうした地方特有の出版図書について、読者の皆様に情報提

供をお願いしたいと思います。また地域のニュースについても話題をお寄せください。事務局への連絡には、同封した応募用紙又はE-mailをご利用ください。よろしくお願い申し上げます。

土木学会土木史研究委員会監修
土木史フォーラム No.12
発行者 土木史フォーラム小委員会
代表者 窪田 陽一
事務局 埼玉大学工学部 深堀 清隆
〒338-8570 埼玉県浦和市下大久保255
TEL 048-858-9549 / FAX 048-858-7374
Email: fukahori@post.saitama-u.ac.jp
URL: http://www.city.civil.saitama-u.ac.jp/
chsce/newsletter.html

CONTENTS

- NEWS		
The 88th anniversary of Nihonbashi bridge construction	SUZUKI Nobuharu	1
- FORUM		
Exhibition report "L'Art de L'ingenieur" in Paris	OKABE Noriaki	2
- LOCAL NEWS		
Repair of Minasebashi bridge in Ehime	OKAZAKI Naoji	3
A historical remain of road in the Nara period found in Toyokawa	YAMANE Iwao	3
- OVERSEAS NEWS		
Travels in Netherlands	HANZAWA Yoshio	4
- HERITAGE REGISTRATION LIST		5
- OTHER INSTITUTIONS		
Report from The Institute of Electrical Engineers of Japan	TAKAHASHI Yuzo	5
- REPORT FROM CHSCE (Committee on Historical Studies in Civil Engineering)		
The 19th Conference of CHSCE in Kansai University		6
Call for paper of the 20th conference of CHSCE		6
Committee member list		7
- WHAT'S ON		
The second Australasian Conference on Engineering Heritage		7
Conference of IHTIA on historical bridge		7
- BOOK GUIDE		8